

論 文

中国における太宰治文学紹介の復活

—— 雑誌『外国文芸』と張嘉林訳「維榮的妻子」に注目して ——

史 蕊

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

The Revival of the Introduction of Osamu Dazai's Literature in China: A Focus on the Journal "Foreign Literature and Art" and Zhang Jialin's Translation of "Villon's Wife"

Shi Rui

Abstract: "Villon's Wife" ("Viyon no Tsuma") stands as one of Osamu Dazai's novels which was crafted in the "female monologue" style. In February 1979, the Chinese version, translated by Zhang Jialin, appeared in the journal "Foreign Literature and Art." Following 'the embryonic phase' and 'the silent phase,' the introduction of Osamu Dazai's literature in China entered 'the revival phase,' and Zhang's translation of "Villon's Wife" played an important role during this period. The current paper first provides an overview of 'the embryonic phase' and 'the silent phase.' With this as a basis, it focuses on Shanghai Translation Publishing House, the journal "Foreign Literature and Art," and Zhang's translation. This paper delineates the establishment of the publishing house, the features of the journal, the rationale behind introducing Dazai and "Villon's Wife," and the translation itself. Importantly, the paper attempts to clarify how the introduction of Osamu Dazai's literature experienced a revival in China. In August 1981, another work by Dazai, "The Setting Sun" ("Shayō"), was also translated into Chinese by Zhang Jialin, and it was featured in the "Series of Foreign Literature and Art," edited by the editorial department of "Foreign Literature and Art;" this aspect is also described in this paper.

Keywords: Osamu Dazai, Introduction, China, "Foreign Literature and Art," "Villon's Wife"

はじめに

1940年代に入ると、「皮膚と心」「きりぎりす」をはじめとして、太宰治作品は、翻訳を通じて中国に紹介され、それによって中国における太宰治文学の紹介や受容の幕が開く。しかし、その文化交流は長く続くことがなく、1950年代-1970年代前半において沈黙に移った。1970年代後半になると、文化大革命の終結や改革開放政策などの影響を受け、外国文学作品の紹介が盛んになるにつれ、中国における太宰治文学の紹介もようやく活力を取り戻し、いわゆる〈復活期〉(1970年代後半-2000年代前半)を迎えるに至る¹。1979(昭和54)年2月発行の雑誌『外国文芸』1979年第1期・総第4期に刊行された、張嘉林訳「維榮的妻子」(「ヴィヨンの妻」という一篇は、まさに中国における太宰治文学紹介の復活を告げる作品であり、重要視されるべきものであろう。

「ヴィヨンの妻」は1947年3月発行の『展望』に発表された短編小説である。内容としては、ほぼ一人で発育不良の息子の世話をしている「私」が、「日本一の詩人」と呼ばれながら、勝手気儘な生活を送っている夫の代わりに借金を返済するために小料理屋・椿屋で働くようになったことを描いており、太宰が得意とする女性独白体で綴られた作品の一つである。同時代評にはやや否定的な評価²があるものの、「太宰君が戦後書いた小説の中では一番骨組のあるちやんとした作品³」「心の急所に触れて来た⁴」など、「ヴィヨンの妻」を高く評価する記述が多数見られる。

先行研究では、張嘉林訳「維榮的妻子」への言及がいくつか見られる⁵が、掲載の場との関連、そして太宰と「ヴィヨンの妻」が紹介される背景などの諸問題は扱われない傾向にある。そこで、本稿は上海訳文出版社と雑誌『外国文芸』、そして張嘉林訳「維榮的妻子」への考察を通じて、これまであまり検討されてこなかった、太宰および「ヴィヨンの妻」が翻訳文学作品として選択された要因などの諸問題を検討するとともに、中国における太宰治文学紹介はいつにして復活を迎えたのかを明らかにすることを試みる。また、『外国文芸』編集部の企画下で出版された『外国文芸叢書』についても言及する。

第一節 中国における太宰治文学紹介の〈復活期〉以前の状況

前述したように、中国における太宰治文学の紹介や受容は〈復活期〉に入る前に、〈萌芽期〉と〈沈黙期〉といった二つの段階を経験していた。どのよ

うな背景があつて、〈復活期〉に入ったのかを解明するために、まずは歴史や時代的要素を視野に入れながら、〈萌芽期〉および〈沈黙期〉の状況について触れておきたい。

日本の近代文学作品は清朝末期に中国に翻訳紹介されはじめたが⁶、太宰治作品の最初の中国語翻訳作品である白雲訳「皮膚病」（「皮膚と心」）は、1940年2月1日付で華文雑誌『新輪』第2巻第2期の掲載によって初めて中国国内に紹介された⁷のである。1920年から1937年にかけては日本文学が盛んに中国語に翻訳されていたのに対し、1937年7月から1949年末のいわゆる日中戦争勃発から第2次国共内戦の収束までの期間には、中国における日本文学の訳本はおおよそ50冊しかなく、雑誌に発表された訳文も大幅に減少したという⁸。長引く戦争がもたらした影響がその大きな理由である。具体的には、戦時下の日本文壇の戦争文学の流行、中国の日本文学翻訳家の戦争への挺身、そして出版社と印刷場が戦火によって破壊されたことなどが挙げられる⁹。つまり白雲訳「皮膚病」は、まさに戦争という非常事態において現れた翻訳作品であるといえる。また、〈萌芽期〉に出現したその他の太宰文学翻訳作品も、白雲訳「皮膚病」と同様、戦時下に世に出された。さらに、それら翻訳作品の掲載の場となる出版物には、日本文学の中国語翻訳作品を含む日中文化交流に関わるものを掲載することによって、大東亜戦争を文化面から支持する傾向が明らかに見てとれる¹⁰。このように、太宰治文学の〈萌芽期〉の作品は当時の日本政府が戦争を目的に提唱していた、日満支の「文化における連関を作り出すための手段として利用されていた可能性が高く、戦争遂行への協力が期待されていたと考えられる¹¹。

1950年代から1970年代前半にかけて、中国における太宰治文学の紹介や受容は〈沈黙期〉に転じる。1949年10月1日、中華人民共和国が成立した。その後、中国における翻訳に関する諸問題への検討は、政府や団体の関与も見受けられるようになり、1951年11月5日-12日に中央人民政府出版総署によって開催された「全国第一回翻訳工作会議」¹²と、1954年8月19日に中国作家協会の「全国文学翻訳工作会議」¹³が重要な例として挙げられる。それらの影響を受け、中国における外国文学の翻訳も次第に重要視されるようになり、中国国内における日本文学の翻訳も10数年間の〈繁栄期〉（1953年末-1965年）を迎えた¹⁴。この期間には、日本の古典文学（「古事記」など）や明治期の文学（「浮雲」「吾輩は猫である」など）、プロレタリア文学（小林多喜二や宮本

百合子などの作家の作品)、そして戦後の文学作品(「真空地帯」など)が盛んに中国に紹介された¹⁵⁾。

しかし、その日本文学翻訳の〈繁栄期〉において、太宰治文学は翻訳対象として大きく注目はされなかった。主たる理由は二つ考えられる。一つは、太宰と戦争との関連である。前述したように、太宰治文学の〈萌芽期〉の翻訳作品のほとんどは、文化面から日本政府のプロパガンダを支持することによって、大東亜戦争の遂行に協力する性格を有する出版物に掲載されていた。加えて、太宰は「内閣情報局と文学報国会との依頼で¹⁶⁾」小説「惜別」を創作した事実があるため、当時の中国側にとって戦争を支持する作家として排される可能性が高いだろうと考えられる。もう一つの理由は、太宰は戦後、無頼派文学の代表作家の一人として広く認識されており、その作品の内容にはデカダンスで退廃的な要素が含まれるため、翻訳作品にふさわしくないと判断されたことが考えられる。当時の中国には、退廃的な要素があることを理由に、太宰治文学を否定する見方が存在した。一例を挙げると、1948年11月発行の『小説』には、「太宰治自殺」と題する短文が見られ、その内容は、(太宰治の)「小説充滿極端的破壊思想、遺害一般青年」(拙訳:小説は極端な破壊思想に満ち、一般青年に災いを残す)との評論が引用され、(彼の「東京八景」などの作品は)「都只以故事情節曲折動人吸引読者、其思想背景却是包含着不少毒素的」(拙訳:そのどれもが物語が込み入っていることだけで読者の目を引き、その思想の背景には人々に悪影響を及ぼす要素が少なくなかった)¹⁷⁾と述べられている。このように、作者は太宰治文学における退廃的な要素を「人々に悪影響を及ぼす要素」とであると批判し、作家自身とその作品を低く評価している。このような批評の出現も、太宰治文学が〈繁栄期〉において見過ごされていた一因であろうと考えられる。

1966年5月から1976年10月にかけての江青・張春橋・姚文元・王洪文の「四人組」らが主導した文化大革命など政治問題は、中国本国の文芸創作だけでなく、外国文学の翻訳活動にも暗い影を落とした。当時の中国において、文芸活動や外国文芸作品の閲覧・伝授・翻訳・紹介などの活動は厳しく制限されており、老舍や傅雷夫妻らのように文化人の中にはひどい迫害を受けた人も少なくなかった。また、翻訳文学は政府のイデオロギーを宣伝する一種の手段として管轄を受けており、出版を許可されるのはごく一部に過ぎなかったのである。例えば、1971年から1973年にかけて、日本文学の翻訳作品を選

扱する際に、中国国内では〈軍国主義〉文芸の批判に重点が置かれ、反面教師として三島由紀夫の作品が内部発行の形で多数翻訳された¹⁸。

1976年10月、「四人組」が北京で逮捕され、長年にわたる文化大革命が終結を迎えた。1978年12月、中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議が開催され、改革開放政策の提起・実施をみることになる。それ以降、外国文学作品の翻訳活動が盛んに行われはじめた。このように、当時の中国の翻訳文学の出版状況は国家、政府、そして時事など外部からの影響を大きく受けていたといえよう。

第二節 上海訳文出版社と雑誌『外国文芸』への注目

本節では、上海訳文出版社の設立、そして雑誌『外国文芸』の性格などの諸問題について確認する。「四人組」の崩壊により、当時の中国は政治的、経済的に新しい局面を迎えただけでなく、文化面でも新たな発展を見せている。そのような影響下で、中国における外国文学作品の伝播も一定の自由度を獲得し、外国の文学理論などの紹介も積極的に行われるようになった。

1978年1月1日、元々は上海人民出版社の編訳部門であった上海訳文出版社は、上海市委宣伝部と出版局の命令によって独立した出版社として設立されたが、その主たる仕事は外国文学と社会科学の翻訳と紹介、そして外国語教材の出版であった¹⁹。成立してまもない1978年7月、中国国内の読者に現代および当代の諸外国の新しい作家と文学作品を中心に、外国文学における思潮と動向を紹介することを目的とした雑誌『外国文芸』（隔月刊）の創刊号が出版された²⁰。本雑誌は、中国政府が同年から採用していた改革開放政策のもと、全国的に外国当代文学を紹介する専門誌の中で率先して創刊されたものであり、「当代世界文学に向けての窓口」と称されていた²¹。

創刊号に付されている「編後記」には、本雑誌の発行理念、対象読者、発行方式などを確認できる内容が綴られている。以下に引用する。

《外国文艺》以马列主义和毛泽东思想为指导，有选择有重点地介绍当代外国文艺（以文学为主，包括戏剧文学、电影文学，兼及音乐、美术）作品和理论，介绍外国当代有代表性的文艺流派及其作家的代表作，反映外国文艺思潮和动态，供有关部门和专业文艺工作者了解和研究。它是一个以宣传、文教等领导部门的负责同志、外国文艺教学和研究人员、专业文艺单位和专业

文艺工作者为对象的内部期刊。今年暂为不定期，以创造条件于明年过渡为双月刊。²²

(拙訳：『外国文芸』はマルクスレーニン主義と毛沢東思想を指針とし、当代の外国文芸（文学を主とし、劇文学と映画文学を含めて、音楽と美術を兼ねる）作品と理論を取捨選択して紹介し、当代の外国の代表的な文芸流派とその作家の代表作を紹介し、また外国文芸思潮と動向を反映し、関連部門と文芸に従事する専門の人々の理解や研究に資するものを提供する。宣伝や文教などの指導部門の担当者、外国文芸の教育や研究に携わる者、専門の文芸機関、そして専門の文芸従事者を対象とする内部雑誌である。来年は隔月刊で発行できる条件を整備するために、今年はしばらく不定期で発行することとする。)

このように、「編後記」においては国家の政治的イデオロギーを意識的に強調した記述が多数存在する。また、『外国文芸』編集部は巴金、沈柔堅、草嬰、譚抒真、周煦良、任溶溶、李侗民らの上海文芸戦線に関わる7人によって執筆された、「高举毛沢東思想的偉大旗幟，深入揭批“四人幫”，做好現代外国文芸的介紹和研究工作」（拙訳：毛沢東思想の偉大な旗印を高々と掲げ、「四人組」を深部まで暴き出して批判し、現代の外国文芸を紹介・研究する仕事にしっかりと取り組む）を題とする筆談を、紙幅を惜しまず創刊号に載せている。その筆談は当時、「四人組」の罪を暴いて批判するために、全国で展開されていた「第三戦役」に協力するために設けられたものである²³。ここからは『外国文芸』編集部が国家の方針や時勢に準じようとする一面が見られる。前述したように、当時の中国の翻訳文学の出版には国家、政府、そして時局など外部からの影響が大きく及んでいる。こうして、『外国文芸』編集部は国家の政治的イデオロギーへの協力に関わる内容を雑誌に反映させ、外部条件に迎合することによって、雑誌発行の可能性を担保しようとした工夫と戦略が見てとれる。また、創刊当時の主たる読者群は一般的な大衆読者ではなく、宣伝や文教などの指導部門の担当者、外国文芸関係の教育者や研究者、そして文芸関係従事者、すなわち一定の知識や文学素養を有する人物であることも特徴的で、当時の外国文芸を紹介する雑誌において異彩を放っている。

ここでもう一つ注目したいのは、内部発行である。内部発行は1950年代に特殊な出版方式として現れ、文化大革命中に確立された²⁴。それに分類される書籍は、「ある分野において一定の研究価値を持つが、公に発行・伝播するには適しておらず、特定の読者にのみ提供する出版物である²⁵」。『外国文芸』

は創刊号から内部発行の形を取り、またそれを1980年6月に出版した1980年第3期・総第12期まで維持された。このような形は、雑誌の性格や内容に関係していると考えられる。『外国文芸』は創刊初期から現在まで一貫して開放的な態度とパイオニア精神²⁶を持ち続けており、外国の新しい文学や思潮を紹介することに重点を置いていた。新たなものを取り扱うことは、雑誌の独自性の形成や雑誌群における地位の確立には役立つが、それと同時により大きなリスクが伴うと考えられる。つまり、内部発行は『外国文芸』編集部が閲覧範囲を限定し、雑誌発行のリスクを低減するための方法の一つであると²⁷考えられる。

『外国文芸』雑誌創刊30周年座談会²⁸に、当時の編集長であった呉洪は雑誌の最も大きな特徴は前衛性であると指摘し、発行部数は10万冊以上に達したこともあると述べている。また、『外国文芸』を通して外国の一流の作家や作品に触れることができ、「これらの文豪を通して滋養を得ることができた²⁹」と上海市作家協会主席の王安憶が回想したように、『外国文芸』は数多くの中国人作家に多大な影響を与えていた。このように、本雑誌は外国の作家や作品を積極的に紹介することを通じて、中国国内の読者が外国文学を知るうえでの重要な橋渡しの役割を果たしたといえよう。

第三節 太宰および「ヴィヨンの妻」が選択された背景

本節では、『外国文芸』編集部による作品選択の傾向に着目することによって、太宰および「ヴィヨンの妻」が翻訳文学作品に選択され、中国人読者に紹介された背景を検討する。

創刊初期、『外国文芸』編集部は、諸外国における代表的かつ大きな影響力を有しつつも、まだ中国に紹介されたことのない外国人作家とその作品を取り上げることに重点を置いていた。その内容については「上海訳文出版社第四編輯室」によって執筆された「《外国文芸》和《外国文芸叢書》」と題した文章に明白に綴られている。原文の一部を以下に引用する。

《外国文艺》杂志出版后受到读者的重视和欢迎，因为它及时介绍了各国
有代表性而我国又从未介绍过的作家，如美国的贝娄（略），日本的川端康成、
太宰治、坂口安吾、安部公房，（略）等等。（略）

自然，当今外国文艺流派繁多，情况复杂，创作方法各各不同，但作为

文艺工作者，却还是应该知道一些，《外国文艺》尽可能选其有较大影响的加以介绍，供大家参考。³⁰

(拙訳：雑誌『外国文芸』は出版された後、アメリカのペロー（中略）、日本の川端康成、太宰治、坂口安吾、安部公房、（中略）など、これまで中国に紹介されたことのない各国の代表的な作家をすぐに紹介したため、読者の注目と歓迎を呼んだ。（中略）

当然、今日の外国文芸にはさまざまなジャンルがあり、状況が複雑で創作方法も異なるが、文芸に従事している者として、その一部を知っておくべきであると考え、皆さんのご参考になるよう、『外国文芸』は可能な限り、比較的に大きな影響力を持つものを紹介するつもりである。)

このように、太宰は「これまで中国に紹介されたことのない各国の代表的な作家」の一人に挙げられている。管見の及ぶ限りでは、『外国文芸』が創刊された1978年以前にも、中国における太宰治本人に関する紹介はすでに確認でき³¹、さらにその作品に基づいた中国語翻訳作品である白雲訳「皮膚病」が早くも1940年発行の華文雑誌『新輪』に掲載されている³²。編集部の中国における太宰治文学の紹介状況に関する記述の正誤の問題はともかく、以上の引用文からは『外国文芸』は、中国に紹介されたことのない日本の代表的作家を取り上げる目的で、太宰を選択したことが明白である。

また、『外国文芸』の主編を務めていた湯永寛は「開辟面向当今世界文学的窓口——《外国文芸》与“外国文芸叢書”」という文章で、雑誌創刊初期の様子について次のように述べている。編集者は「長期にわたって閉鎖されていた中国国内の読者に計画的、かつ系統的に第二次世界大戦前後の当代の世界の主要国家の新文学、新流派、新作家および新作品を紹介していた。例えば（中略）日本の斜陽派、戯作派などの流派の作家と作品³³」。ここで「斜陽」は太宰が1947年に『新潮』に発表した小説である「斜陽」を連想させる。こうして、編集者の太宰およびその作品に対する関心の高さがうかがえる。さらに、張嘉林訳「維榮的妻子」が雑誌に掲載された時期や巻号から見れば、太宰および「ヴィヨンの妻」は比較的に早期から紹介されており、そこには編集者の太宰および該当作品に対する注目度も推し量ることができよう。

では、なぜ「ヴィヨンの妻」が選ばれたのだろうか。それについては主に二つの理由が考えられる。まずは、文体面で、「ヴィヨンの妻」は女性独白体の作品の一つであり、太宰のこの形式によって創作された作品は、「彼の長短

まじえた小説作品の一割強にあた³⁴り、太宰治文学において重要な意味を有している。編集部は女性独白体という特殊な文体形式を紹介することを目的とし、「ヴィヨンの妻」を選択した可能性が高いと考えられる。そういった点は『外国文芸』にだけでなく、中国における太宰治文学紹介の〈萌芽期〉にも同じような傾向を見出せる。〈萌芽期〉に紹介された「皮膚と心」や「きりぎりす」はいずれも女性独白体で綴られた作品である。また、当時の『外国文芸』は外国文芸関係の教育者や研究者を対象としたものであったため、文学研究、すなわち太宰治文学の研究を意図して「ヴィヨンの妻」を紹介した可能性もあると考えられる。

二つ目の理由を考えるには、『外国文芸』におけるもう一つの作品選択の傾向に注目する必要がある。それはつまり、人間のすべての感情を尊重し、またその感情を描写する作品を雑誌に取り上げようとした点である³⁵。文化大革命期に発行された外国文学の翻訳作品は、「革命的」「進歩的」なものがほとんどであり³⁶、人間性、特に虚無的・退廃的な心情を表す外国文学作品は主流とかけ離れていたといえる。『外国文芸』編集部はそれら人間の感情を緻密に描く外国文学作品を積極的に紹介することを通じ、陳思和が述べているように、「現代の社会環境に属している精神状態³⁷」を当時の中国人読者に伝えようとしたのである。こうして、人間の感情や内面心理、そして人間としてのあり方への探求のような内容を扱う「ヴィヨンの妻」は編集部の文学をめぐる価値観に合致したものであったため、作品として翻訳紹介されたものと考えられる。『外国文芸』の掲載により、かつて「人々に悪影響を及ぼす要素」に満ちていると批判されていた太宰治作品も、次第に見直されるようになったのである。

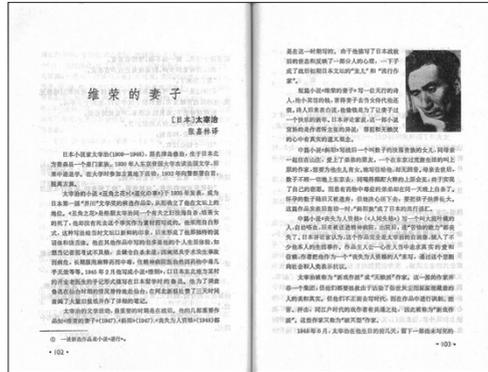
第四節 張嘉林訳「維栄的妻子」の考察

訳文の考察に入る前に、まずは訳者である張嘉林について触れておきたい。現段階で調べた限りでは、張嘉林の日本文学の翻訳活動は1970年代-1980年代に集中しており、「ヴィヨンの妻」以外にも、「斜陽」の翻訳にも取り組んでいる。また、遠藤周作「アデンまで」、岩崎京子「小さなハチかい」、住井すゑ「橋のない川」などの日本文学作品の中国語訳をも試みた。張嘉林によって翻訳されたのはほとんど日本において一定以上の知名度を有する作家の代表作といわれるものであり、また戦後に発表された作品である。なお、そ

の多くの翻訳文学作品が掲載されたのは『外国文芸叢書』や『維榮的妻子 当代日本小説集』であり、いずれも上海訳文出版社によって刊行された。ゆえに、張嘉林の日本文学の翻訳活動は、上海訳文出版社と深い関わりを持っているといえる。

1981年8月に、太宰のもう一つの代表作「斜陽」に基づいて張嘉林が翻訳した『斜陽』には、「本書は1954年9月に日本の筑摩書房によって発行された『現代日本文学全集』第49巻³⁸により翻訳したものである³⁹」と明記されていることと、内容を照合することにより、張嘉林が本稿で取り扱う「ヴィヨンの妻」を翻訳した際に底本にしたのも、同書所収の「ヴィヨンの妻」であると推測される。また、原文と訳文を比較すると、張嘉林訳「維榮的妻子」にはいくつかの顕著な特徴が見られる。それらは、次のようにまとめられる。

(1) 作品の本文の中国語訳は104頁から127頁まで続いており、本文の前には、訳者によって執筆された、太宰の生い立ち、文学活動、日本文壇における地位などを説明する紹介文が付されている。その紹介文は、外国文学の現状に明るくない読者のために、編集部が新しい流派、または新しい作品を紹介する際に関連資料をもとにして書かれたものである。流派、作家、そして作品に対して簡潔に分析し、評価するとともに、可能な限り作家の肖像を掲載し、読者に親近感を持たせようとしている⁴⁰という。また、翻訳にあたっては、人名、和暦、歴史、そして「土間」のような日本特有の文化に対する説明となる訳注も見られる。他の作家の翻訳作品にも同じく紹介文と訳注が添付されているため、おそらくこれらの二点はいずれも編集部の意思によるものだと思われる。なお、『外国文芸』の読者群を考慮に入れると、紹介文と訳注は、編集側が文芸関係者の文学研究活動を協力する目的に設置された可能性もあると考えられる。以下に太宰の紹介文の一部の画像を添付する。



(图1 張嘉林訳「維荣的妻子」本文の前に付された紹介文の一部。
『外国文芸』1979年第1期・総第4期102-103頁にもづく。)

(2) 原文における敬語表現を一部削除していることと、文の構造や順序を変更していることなど、訳文をわかりやすくするための訳者の工夫が見られる。「私」と深夜に帰宅した夫との会話の場面を例に引用しながら説明する。

①原文：あととはただ、はあつはあつといふ荒い呼吸ばかりで、何をしてゐる事やら、私が寝たまま、
「おかへりなさいまし。ごはんは、おすみですか？お戸棚に、おむすびがございますけど。」
と申しますと、(264頁)

訳文：以后，除了呼哧呼哧的剧烈呼吸声外，就全然不知他究竟在干什么了。

“你回来啦！饭吃过了吗？食橱里有饭团子，”我仍旧躺在那里对他说了。(104頁)

例①について、現代中国語の文脈においては、一般的に夫婦間の会話の中では丁寧さの度合いが高い敬語を使用することは不自然に感じられてしまうため、張嘉林は訳文において「私」と小料理屋・椿屋の夫婦との会話を翻訳する際によく用いられた「您」（人称代名詞、あなた、あなた方の意味、丁寧さの度合いが高い）を使わず、意識的に「你」（意味としては「您」と一緒だが、丁寧さの度合いはそこまで高くない）を使用している。また、会話文を「私が寝たまま」との動作の前に移動させた部分からわかるように、張嘉林は

文の順序や構造を調整することで訳文の判読性を改善している。そうした工夫は訳文全体に反映されている。

さらに、張は翻訳する際、「漫不经心」(104頁)「盛气凌人」(106頁)「一本正经」(108頁)など、中国人にとって馴染みのある成語を用いる傾向がある。これにより中国人読者の言語習慣に合致し、かつ簡潔な訳文を完成させている。そこからは訳者が訳文の質や文学性を改善しようとする意図がうかがえる。

(3) 張嘉林訳「維荣的妻子」には訳者によるリライトが少なく、内容全体としては原作に〈忠実な〉翻訳となっている。例えば、椿屋の亭主が自分の境遇を「私」に打ち明ける場面である。

②原文：対米英戦がはじまつて、だんだん空襲がはげしくなつて来てからも、私どもには足手まとひの子供は無し、故郷へ疎開などする気も起らず、まあこの家が焼ける迄は、と思つて、この商売一つにかじりついて来て、どうやら罹災もせず終戦になりましたのでほつとして、こんどは大びらに闇酒を仕入れて売つてゐるといふ、手短かに語ると、そんな身の上の人間なのでございます。(266頁)

訳文：到了同美英作战以后，空袭一天天多了起来，可是我们又没有小孩的累赘，又不想疏散回故乡去，心里总是想，只要房子不给轰炸烧掉，就还是要干下去，所以紧紧抓住这生意不放，好容易总算没有遭到灾难，熬到了停战，这才松了一口气，接着便公然做黑市酒的买卖了。简单说，我们的经历就是这样。(109頁)

このように、張嘉林は原文中の戦争、闇商売を描写した内容を改削せずに訳出している。また、借金、威嚇、強盗、婦女暴行、死への憧憬などの描写も避けることなく中国語で表現されている。その点に関して、主に二つの理由が考えられる。一つには改革開放以降、外国文学の翻訳に対する国家や政府の規制がある程度緩和されたため、退廃的な傾向を表す内容への制限も小さくなったということである。もう一つとしては、掲載誌である『外国文芸』は当時、外国文芸関係の教育者や研究者を主要読者に設定していたため、訳文に大幅なリライトを施すと、文学作品の研究に支障をきたす可能性があることが考えられる。そこから、国家政策や掲載誌の性格に気を配った上で翻訳に取り組もうとする張嘉林の姿勢がうかがえる。

最後に、張嘉林訳「維栄的妻子」には誤訳と思われる部分も数箇所存在する。例えば、椿屋の夫婦が家にやってくる場面である。

③原文：二人の客は顔を見あはせ、幽かに首肯き合つて、それから男のひとは様子をあらため、
「何とおつしやつても、私どもの気持は、もうきまつてゐます。しかし、これまでの経緯は一応、奥さんに申し上げて置きます。」(265頁)

訳文：两位客人对看了一下，微微点点头，然后男的改变了态度说：
“不管怎么说，我们的想法已经定了。但是，事情的原委，也得向您太太大体说说清楚。”(107頁)

このように、張は「奥さん」を「您太太」（拙訳：あなたの奥さん）と訳してしまっているが、これは、読者の誤解を招く恐れがある。ここでは、「奥さん」を「太太您」（拙訳：奥さんであるあなた）と訳した方が無難であろうと考えられる。

第五節 『外国文芸叢書』の刊行

張嘉林訳「維栄的妻子」の発表の約2年半後、同じく張によって翻訳された太宰のもう一つの代表作『斜陽』が1981年8月に単行本として出版され、『外国文芸』編集部が企画・発行した『外国文芸叢書』に収録された。「《外国文芸》和《外国文芸叢書》」という一編において、以下のような内容が確認できる。

基于同样目的，《外国文艺》编辑部还编辑出版了一套《外国文艺丛书》，所收都是外国现代和当代著名作家的长篇作品和短篇集子。至1981年底，这套丛书可出版14种，大致有如下几个方面。

（1は英米両国における現代短編小説への紹介を中心としており、2は不条理演劇の紹介に重点を置いているため、ここではその引用を省略する。）

3. 其他均为国外重要作家的长篇著作或短篇集。（略）丛书所介绍的各国作家，如美国的辛格（略），日本的太宰治，（略）等等，在国际上都有一定影响，所收作品也都是他们的代表作。⁴¹

（拙訳：同じ趣旨に基づいて、『外国文芸』編集部は『外国文芸叢書』を

編集・発行し、収録されたのはすべて外国の現代と当代の名作家の長編作品と短編集である。1981年末までに、このシリーズは14種類を出版することができ、大まかに分類すると以下の方面が挙げられる。

3. その他は、いずれも外国の重要な作家の長編作品または短編集である。（中略）この叢書に紹介された各国の作家、例えばアメリカのシンガー（中略）、日本の太宰治、（中略）など、いずれも一定の国際的影響力を持つ作家であり、収録された作品もその代表作である。）

こうして、翻訳作品の選択傾向から見ると、『外国文芸叢書』は『外国文芸』と共通する部分が見出せる。また、日本作家の代表的な人物として列挙され、さらにその作品を早期から『外国文芸叢書』に組み入れていた点から、『外国文芸』編集部の太宰治およびその作品に対する関心と重視が察知できる。

以降、中国における太宰治文学の翻訳や紹介が増えてきた。具体例⁴²として、岳久安訳「畜犬談」（「畜犬談」）（『日語学習与研究』1982年第1期/1982年第2期、《日語学習与研究》雑誌社、1982年1月/1982年3月）、且示訳「摘瘤子」（「瘤取り」）（『日本文学』1984年第4期、吉林人民出版社、1984年）、范満怡訳「桜桃」（「桜桃」）（『当代外国文学』1985年第2期、南京大学外国文学研究所、1985年4月）などが挙げられる。一方、翻訳の発展に伴い、李芒「無頼派文学」初探（『日語学習与研究』1984年第2期、《日語学習与研究》雑誌社、1984年3月）といった、中国における太宰治およびその作品を研究する論考が姿を現しはじめるようになるのである。

おわりに

以上のように、本稿は上海訳文出版社と雑誌『外国文芸』、そして張嘉林訳「維業的妻子」に注目することによって、『外国文芸』の作品選択傾向や、太宰および「ヴィヨンの妻」が選択された背景などの諸問題を検討するとともに、中国における太宰治文学の紹介はいかに〈復活期〉を迎えたのかを解明することを試みた。その復活は文化大革命という大規模な政治運動の終結を背景に、雑誌の前衛性を重視していた『外国文芸』や、工夫をこらしながら翻訳作業に取り組む訳者である張嘉林による共同の努力の結果だと考えられる。様々な障壁を乗り越え、今でも外国の文学と芸術の魅力を中国国内に紹介し続けている『外国文芸』は、中国における太宰治およびその作品の翻訳、紹介および受容を推進しており、太宰治と中国との関わりを検討するうえで

無視できない存在である。また、張嘉林訳「維榮的妻子」は〈復活期〉の最初の翻訳作品として、長く続いた中国における太宰治文学の紹介や受容の沈黙を破った点で、重要な意味を持っていると考えられる。その〈萌芽期〉ないし中国における太宰治文学の紹介や受容の全体的な様相を知るために、張嘉林訳「維榮的妻子」のみならず、太宰治文学のそのほかの翻訳作品への注目も不可欠であると考えられる。

付記

本稿は、日本比較文化学会関西支部3月例会（2023年3月4日、同志社大学）における口頭発表の内容をもとに、加筆・修正を加えたものである。本稿に関して貴重なご教示を賜った方々に心より感謝申し上げる。

「ヴィヨンの妻」の本文引用は『現代日本文学全集49 石川淳・坂口安吾・太宰治集』（筑摩書房、1954年）に、張嘉林訳「維榮的妻子」の本文引用は『外国文芸』1979年第1期・総第4期（上海訳文出版社、1979年2月）に拠った。なお、引用文中の傍線、略、註および中国語の和訳はすべて筆者によるものであり、漢字は適宜新字体に改めた。また、訳作や中国語文献のタイトルに関しては、中国語の漢字を適宜日本語の漢字に変更した。

注

¹ 中国における太宰治文学の翻訳と紹介の状況調査にあたっては、主に中国国家図書館・中国国家数字図書館や、中国における日本文学の翻訳研究関連の書籍を利用・参照した。拙稿「中国における太宰治文学紹介の萌芽——華文雑誌『新輪』および白雲訳「皮膚病」に着目して——」（『近代文学試論』61、2023年12月25日）、25頁を参照。

² 例を挙げると、高見順は太宰の作家としての価値を認める一方、「ヴィヨンの妻」について次のように評している。「太宰治は現代文学における大切な作家のひとりである。「冬の花火」「春の枯葉」で人間の心の深えんをのぞきかけた彼が、「父」、（人間）のようなバラツクを見せるのは残念である。手際の良さが却って悲しい。「ヴィヨンの妻」（展望）にも冒険の戦りつが無い。佳作には相違ないが、お家の芸的安易さである。太宰ならではの深えん的なものをのぞかせはするがそれを安直に売っている。書ける人なのだ。日本文学の為にどつしりとした仕事をしてほしい」。高見順「生命の浪費 文芸時評②」、『東京新聞』夕刊、1947年5月14日。引用は『文芸時評大系 昭和篇Ⅱ 第2巻 昭和22年』（ゆまに書房、2008年）、174頁による。

³ 青野季吉、伊藤整、中野好夫「創作合評会（3）日本文壇の悲劇」（『群像』第2巻第6号、1947年6月）、60頁による。引用箇所は伊藤整による発言である。

⁴ 手塚富雄『「重き流れのなかに」と日本短詩の世界と』（『八雲』11月号、1947年11

月)、24頁を参照。

⁵ 例えば、于梅は「中国における太宰治文学の翻訳と伝播（太宰治文学在中国的訳介）」（山東師範大学修士論文、2015年6月）において張嘉林訳「維榮的妻子」に言及し、掲載誌名や出版時間などの情報を整理している。11頁を参照。

⁶ 康東元「序」（『日本近現代文学翻訳研究（日本近・現代文学の中国語訳研究）』、上海交通大学出版社、2009年）、4頁を参照。

⁷ 出典は注1に同じ。前掲の拙稿を参照。

⁸ 王向遠「第2章 二三十年代的日本翻訳文学（1920-1936）」「第3章 戦争时期的日本翻訳文学（1937-1949）」（『二十世紀中国的日本翻訳文学史』、北京師範大学出版社、2001年）、53頁および173頁を参照。

⁹ 出典は同上、172-173頁。

¹⁰ 出典は注1に同じ。前掲の拙稿を参照。33頁。

¹¹ 同上。

¹² 「全国第一回翻訳工作会議」において、「關於公私合営出版翻訳書籍の規定草案」「關於機關团体編訳機構翻訳工作的規定草案」の二つの公式文書が許可された。高建惠「第24章 兩次翻譯工作會議的歷史地位和意義」（孟昭毅・李載道主編『中国翻譯文学史』、北京大学出版社、2005年）、281-282頁を参照。

¹³ 同上、前掲の高論文を参照。287-288頁。「全国文学翻譯工作會議」において、茅盾は「為發展文学翻譯事業和提高翻譯質量而奮闘」と題する報告をした。

¹⁴ 注8に前掲の王著書、196頁を参照。

¹⁵ 出典は同上、196-197頁。

¹⁶ 太宰治「あとがき（『惜別』）」（『太宰治全集第7巻』、筑摩書房、1990年）、129頁。

¹⁷ 『小説』第1巻第5期（小説月刊社、1948年11月）、75頁を参照。

¹⁸ 注8に前掲の王著書、197-198頁を参照。

¹⁹ 湯永寬「開辟面向当今世界文学的窗口——《外国文芸》与“外国文芸叢書”」（『走過的路』、上海訳文出版社、1998年）、67頁を参照。

²⁰ 注19に同じ。67-68頁を参照。なお、この文章において、湯は『外国文芸』創刊号は1978年6月に読者に公開したと記述しているが、雑誌の奥付には、1978年7月とある。

²¹ 出典は同上、69頁を参照。原文を一部引用する。『外国文芸』は「我国改革开放的新局面新形势下，在全国率先创刊的一份介绍外国当代文学的专业性杂志，（略）成为一个开向当今世界文学的广阔天地的窗口」（拙訳：我が国の改革開放の新しい局面や形勢のもと、全国的に外国当代文学を紹介する専門誌の中で率先して創刊されたものであり、（中略）当代世界文学の広々とした境界に向けての窓口になる）。

²² 「編後記」（『外国文芸』1978年第1期・総第1期、上海訳文出版社、1978年7月）、319頁。

²³ 出典は同上。

²⁴ 辺国恩「第27章 “文革” 十年的翻譯文学概況」、出典は注12に同じ。393-394頁を参

照。

²⁵ 「關於加強内部發行圖書管理的通知」（新聞出版總署圖書出版管理司編『圖書出版管理手冊』、中国法制出版社、2006年）、336頁を参照。原文を次のとおり引用する。「内部发行图书是指在某一领域具有一定研究价值，但不宜公开发行和传播，仅供部分特定读者阅读的出版物」。

²⁶ <https://weibo.com/ttarticle/p/show?id=2309404482379988205757>を参照。（最終閲覧日：2023年12月28日18時）。『外国文芸』の編集長を務める黄昱寧は「《外国文芸》改版焕新 | 主編新刊寄語」において、「从1978年夏天问世的创刊号开始，开放态度和先锋意识就是《外国文艺》的旗帜」（拙訳：1978年夏の創刊以来、『外国文芸』の旗印は、開放的な態度とパイオニア精神であった）と述べている。

²⁷ 倪嘉源「1978-1980《外国文芸》訳介与文学觀念的變革」（上海外國語大學修士論文、2008年4月）、28-29頁を一部参照。

²⁸ 「『外国文芸』雑誌創刊30周年座談会」の様子については石劍峰「『外国文芸』照耀了1980年代」を参照した。

²⁹ 出典は注28に同じ。原文は次のとおり引用する。「我们通过这些文豪汲取养分」。

³⁰ 上海訳文出版社第四編輯室「《外国文芸》和《外国文芸叢書》」（中国出版工作者協會編『中国出版年鑑1981』、商務印書館、1981年）、264-265頁。

³¹ 例えば、1945年4月1日に創刊された総合雑誌である『新世紀月刊』の創刊号において、盧錫熹訳「清貧譚」（「清貧譚」）が掲載され、また、同誌の「編輯室雜談」には、「太宰治は日本名浪漫派作家作品深得日本知識青年愛好」（拙訳：太宰治は日本の有名な浪漫派作家であり、その作品は日本の知識青年に深く愛好されている）といった太宰を紹介する文章が見られる。『新世紀』創刊号（新世紀月刊社、1945年4月）、30頁を参照。

³² 出典は注1に同じ。前掲の拙稿を参照。

³³ 出典は注19に同じ。68頁を参照。原文の一部を次のとおり引用する。「向国内长期被封闭的读者有计划有系统地介绍了第二次世界大战前后以来当代世界主要国家的新文学新流派新作家和新作品。如（略）日本的斜阳派、戏作派等等流派的作家与作品」。

³⁴ 東郷克美「太宰治の話法 女性独白体の発見」（『日本文学講座6 近代小説』、大修館書店、1988年）、309頁。

³⁵ 出典は注27に同じ。26-28頁を参照。

³⁶ 出典は注24に同じ。396頁を参照。

³⁷ 陳思和「想起了《外国文芸》創刊号」（『博覽群書』第4期、1998年4月）、19頁を参照。原文を次のとおり引用する。「一种属于现代社会环境里的精神状态」。

³⁸ 『現代日本文学全集49 石川淳・坂口安吾・太宰治集』（筑摩書房、1954年）。「太宰治集」には「思ひ出」「魚服記」「富嶽百景」「走れメロス」「ヴィヨンの妻」「斜陽」「桜桃」「人間失格」といった8作が収録された。

³⁹ 『外国文芸』編集部編、太宰治著、張嘉林訳『斜陽』（上海訳文出版社、1981年）を参照。原文は次のとおりである。「本书根据日本筑摩书房《现代日本文学全集》第49卷

1954年9月版译出」。

⁴⁰ 注19に同じ。68-69頁を参照。

⁴¹ 出典は注30に同じ。265頁を参照。

⁴² 注5に前掲の于論文、11-12頁を一部参照。